

「剣対剣」及び「剣対杖」の初期動作について (Ver.3)

廿日市合気道クラブ (2023年5月5日)

剣と杖では使い方が違います。剣は斬るので求心力を使います。すなわち、遠くから自分の手前のほうに引いて斬ります。基本的に剣は体の柔らかい部分(首、脇腹)をねらいます。一方、杖は“打つ、突く”ですから、遠心力を応用して使います。つまり、遠くへ押し出すような力を使います。杖の場合は体の強い部分(頭、すね、小手)をねらいます。杖の“打つ”は先端でとらえます。(中略) 剣、杖を使うにあたってこのことを頭に入れておかないと、技に対するとらえ方を間違ってしまう。(以上、西尾昭二「許す武道 合気道」より)

1. 向かい合ったら、剣先同士または剣先と杖先を交差し、間合いを測る。
2. 剣対剣の場合、取りは自然体のつくりで、剣先を下に落として中心線上に置く(写真左)。受けは正眼(中段)の構え。
3. 剣対杖の場合、取りは自然体のつくりで、杖先の延長線を相手の目に結ぶ(写真右)。受けは正眼(中段)の構え。



4. 剣対剣の初期動作

4-1) 相半身、右入身、上段の左小手抑え(おもに逆半身の片手取りを想定)

受けが振り被ると同時に右に入身し、受けの右脇から左小手に剣先を返し、受けの左小手を抑える。



4-2) 相半身、右入身、下段の左小手抑え(おもに正面打ちの内入身を想定)

受けが振り被ると同時に右に入身し、剣先を受けの右脇から上に逃がして振り被り、受けが振り降ろした左小手を抑える。



4-3) 逆半身、右入身、中段の両腕抑え(おもに突きの内入身を想定)

受けが突くと同時に右に入身し、剣先を受けの前に残しつつ受けの剣を左に受け払ってから、受けの腕を抑える。



4-4) 相半身、左入身、下段の剣抑え (おもに正面打ちの外入身を想定)

受けが振り被ると同時に左に入身し、剣先を受けの右脇から右側頭を剣の峰で打ってから首をとらえ、受けが振り降ろした剣を抑える。



4-5) 相半身、左入身、下段の右小手抑え (おもに相半身片手取りの外入身を想定)

受けが振り被ると同時に左に入身し、剣先を受けの右脇から左外に逃がして、受けが振り降ろす剣を受け流し、受けが振り降ろした右小手を抑える。



4-6) 逆半身、八相の構えでの受け払い (おもに逆半身の横面打ちを想定)

受けの横面打ちに対し、やや左に体を開きつつ腰を回して、受けの剣を左に受け払いながら八相の構えになる。



5. 剣対杖の初期動作

5-1) 相半身、右入身、左小手抑えからの突き (おもに逆半身の片手取りを想定)

受けが振り被ると同時に右に入身し、杖先を受けの眼前に突き付けつつ杖の後端で受けの顎を打って杖先を回して、受けの左小手を抑えてから杖先を受けの喉元に突き付ける。



5-2) 相半身、右入身、面打ちからの突き (おもに正面打ちの内入身を想定)

受けが振り被ると同時に右に入身し、杖の後端で受けの顎を打って杖先を回して受けの面を打ってから、剣を振り降ろした受けの喉元に杖先を突き付ける。



5-3) 逆半身、右入身、中段の腕抑え (おもに突きの内入身を想定)

受けが突くと同時に右に入身し、杖で受けの剣を左に受け払ってから、受けの腕を抑える。



5-4) 相半身、左入身、下段の右小手抑え (おもに正面打ちの外入身を想定)

受けが振り被ると同時に左に入身し、杖先を受けの眼前に突き付けつつ杖の後端を取って杖先を回して受けの顎を下から打ち、さらに側頭を打ってから、杖を取り直して (または杖先を受けの頭の上で回して) 剣を振り下ろした受けの喉元に杖先を突き付ける。



5-5) 相半身、左入身からの下段の右小手抑え (おもに相半身片手取りの外入身を想定)

受けが振り被ると同時に左に入身し、杖先を受けの眼前に突き付けつつ杖の後端で受けの顎を下から打ち上げながら杖を回して受けの側頭を打ってから、杖を取り直して剣を振り下ろした受けの喉元に杖先を突き付ける。



5-6) 逆半身、杖の後端での受け払い (おもに逆半身の横面打ちを想定)

受けの横面打ちに対し、やや左に体を開きつつ腰をしっかりと回して、逆手で受けの剣を迎え入れ、杖の後端で左に受け払う。



6. 参考及び写真引用の書籍

本説明文の作成にあたっては、『西尾昭二の「許す武道 合気道」入身一足の理合 (2007年、発行所: 合気ニース)』を参考にするとともに、同書籍から文中の写真を引用した。

以上